

メシアン夫妻が育て、 ブーレーズが絶賛する現代の巨匠、 ピエール=ローラン・エマール、 東京リサイタルの曲目を大いに語る!

インタビュー・構成: 野平多美 (作曲、音楽評論)

卓抜のテクニック、ほとばしる情熱とクールな審美眼、そして大なる構成力をそなえたフランス人ピアニスト、ピエール=ローラン・エマールの東京リサイタルがいよいよ来る7月15日に実現する。

ロンドンのウィグモア・ホールで大成功を収めたバッハの〈フーガの技法〉を、日本で聴ける日が近づいている!

「今回は、対位法書式の崇高な完成品であるバッハの〈フーガの技法〉を核にして、他の作曲家の作品と組み合わせたプログラム構成です。」と彼は語る。

バッハの〈フーガの技法〉は、多彩なカノンと多種の技巧なフーガの全19曲(第19番は未完)からなる曲集である。この中から9曲を選び、エマールは斬新なアイデアで、東京のリサイタルのためだけにスペシャルプログラムを編んだ。それは一見ただけでは判りにくい、思索の綾が縦横に張り巡らされているのである。

「プログラムは、まずイントロダ

クションとしてのフーガ(フーガの技法)から『コントラプク투스』で始まり、同『3度の対位における10度のカノン』とカーター作品で各種カノンを聴いた後、メシアンの〈前奏曲〉で一段落します。この〈前奏曲〉にも、実はカノンが用いられています。」と彼は言う。

「それと同時に、メシアンの〈前奏曲〉は、後半プログラムのフーガ5曲を導くための“前奏曲”という意味もあわせ持っています。ご存知のように〈フーガの技法〉には前奏曲がありませんから、“前奏曲とフーガ”の前奏曲部分をメシアンの〈前奏曲〉で代用しているわけです。」

そして最後にベートーヴェンのソナタの中のフーガで、演奏会を締めくくります。」

もう一つのプログラムの見方としては、“ポリフォニー/ポリフォニスト”がキーワード。

「プログラムの中で、バッハ〈フーガの技法〉は“時間の連続体”として横たわり、ポリフォニーのいく

つかの側面がそれ自身に組み込まれています。

100歳を迎えるJ. E. カーターは、私にとって現存する最も素晴らしいポリフォニスト(多声音楽作曲家)です。バッハが音楽史上のポリフォニストの代表だとすると、カーターは現代ポリフォニストの代表というわけです。



カーターの2作品は4分くらいの短い曲ですが、アイデアがとても新鮮です。2声でカノンのように書かれていて、バッハと同じくそれぞれが強い意志によって作曲されています。

メシアン作品においては、ポリフォニーは技術として偶発的に扱われています。オルガニストが弾いているのが見えるような曲もあり、ときにカノンも出てきます。ベートーヴェン作品においては、ポリフォニーが引用され(ソナタ形式に、異なる様式であるフーガが移植されている。このように4人の作曲家が、違うやり方でそれぞれポリフォニーを見事に具現しているのです。)



「後半に演奏する〈フーガの技法〉からの5つのフーガは、3つのドラマティックな二重フーガの間に、シンプルな2つのフーガを配しました。後者とベートーヴェンにもさらに関係性が隠されています。

シンプルなフーガの二つめの『コントラプク투스XII.2』は、〈鏡像のフーガ〉(同XII.1の上下が逆に進行)ですが、それはベートーヴェンのソナタの後半のフーガ、同じく〈鏡



像のフーガ)を予告しているのです。

また、“悲嘆”もキーワードで、〈フーガの技法〉の『反進行における拡大カノン』の悲哀に満ちた表情豊かなカノンと、母を亡くした直後のメシアンの作品〈前奏曲〉、そしてベートーヴェンのソナタの“悲しみのアリオソ”を結びつけています。」

「このプログラムにはたくさんの曲が並んでいますが、それらが有機的でとても組織的であることを聴き終わったら感じていただけたと思います。何しろ、今回の東京のリサイタルだけに私自身が考えたプログラムですから! プログラムを組む立てることは、大きなよこごびです。聴衆に敬意を表し、いかに知的好奇心に訴えて興味を持ってもらうか、またアプローチの方法やプログラムの意図の伝達に心を砕きます。

演奏会でバッハを弾くのは今シーズンが初めてです。弾いてみようとしてみたことはありましたが、『いや、まだ早い。バッハを弾くのは音楽家として豊かになった頃、50歳になってからにしよう』と考えていて、

ようやく機が熟したのです。バッハの中でまず〈フーガの技法〉を選んだのは、あまり鍵盤楽器では弾くことの少ない曲集で、演奏法にも音楽学的にも探求するべきことがたくさんあるからです。」

7月の来日までの2ヶ月間の演奏会の予定を尋ねると、P. エトヴェシュ作曲の「2台のピアノのための協奏曲」世界初演、ブーレーズ指揮ロンドン交響楽団との録音、ミネソタのセント・ポール室内オーケストラの、リゲティの「13楽器のための室内協奏曲」とハイドンの交響曲「時計」の指揮と、ベートーヴェンの「三重協奏曲」の弾き振りはじめ、枚挙に暇がないほどの驚異的なハード・スケジュール。

世界を股にかけて行なう演奏、指揮、音楽祭の芸術監督という様々な大役を心から楽しんでいるエマールは、文字通り“現代の巨匠”である。このインタビューで、改めてその感を強くした。

彼のすばらしい日本再上陸を聴きのがす手はない。

ピエール=ローラン・エマール (ピアノ)

1957年リヨン生まれ。パリ音楽院でイヴォンヌ・ロリオとマリア・クルチオに師事。1973年メシアン国際コンクールに優勝し、19歳でピエール=ブーレーズからアンサンブル・アンテルコンタンポランのソロ・ピアニストに指名され、1980年代半ばからジェルジ・リゲティの全作品の録音に加わるとともに練習曲数曲を献呈された。

現在もっとも実力の高いピアニストの1人であり、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、ニューヨーク・フィルなど超一流のオーケストラやジョン・ティモンズ、ラトル、ナガノ、サロネンなど時代をリードする指揮者と共演し、リサイタルも世界の主要都市で開いている。

現在アルテ・テレビに「20世紀の偉大な作曲家シリーズ」を収録中で、第1回のブーレーズ編が絶賛を得た。CDの最新盤はテルデックからの「ベートーヴェン:ピアノ協奏曲全集」(アーノンクール指揮ヨーロッパ室内管)など。

6/6(金) 22:00~
NHK教育テレビ

「芸術劇場」
J.S.バッハ:
フーガの技法 BWV1080
2/17
ロンドンのウィグモアホールでの演奏

音楽の過去、現在、未来すべてに光を当てる、現代最高のピアニストの1人。

WORLD
PIANISTS SERIES
2008-2009

ピエール=ローラン・エマール ピアノ・リサイタル

PIERRE-LAURENT AIMARD

7/15(火) 19:00 東京オペラシティ

J. S. バッハ: フーガの技法 BWV1080より カーター: 2つのダイヴァージョン
メシアン: 「8つの前奏曲」より ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 op. 110

¥7,000 ¥5,000 ¥4,000 プラチナ ¥12,000

1973年メシアン国際コンクールに優勝、「現在並ぶものがない」と評される完璧なテクニックに支えられ、現代音楽における色彩感とリリズムに満ちあふれた演奏はブーレーズ、リゲティら大作曲家からの信頼も厚く、またモーツァルト、ベートーヴェン、シューマンなどでも、深い精神性を湛えた演奏で高く評価されています。とりわけアーノンクール指揮ヨーロッパ室内管と録音したベートーヴェンのピアノ協奏曲全集は絶賛を集めました。バッハからメシアンまで幅広いレパートリーをどのようにプログラミングし、どのように斬新な演奏を披露してくれるか、大きな期待がかかります。



NHKホール楽屋にて、インタビュー、野平多美と

メシアン夫妻が育て、 ブーレーズが絶賛する現代の巨匠、 ピエール=ローラン・エマール、 東京リサイタルの曲目を大いに語る!

インタビュー・構成: 野平多美 (作曲、音楽評論)

卓抜のテクニック、ほとばしる情熱とクールな審美眼、そして大なる構成力をそなえたフランス人ピアニスト、ピエール=ローラン・エマールの東京リサイタルがいよいよ来る7月15日に実現する。

ロンドンのウィグモア・ホールで大成功を収めたバッハの〈フーガの技法〉を、日本で聴ける日が近づいている!

「今回は、対位法書式の崇高な完成品であるバッハの〈フーガの技法〉を核にして、他の作曲家の作品と組み合わせたプログラム構成です。」と彼は語る。

バッハの〈フーガの技法〉は、多彩なカノンと多種の技巧的なフーガの全19曲(第19番は未完)からなる曲集である。この中から9曲を選び、エマールは斬新なアイデアで、東京のリサイタルのためだけにスペシャルプログラムを編んだ。それは一見ただけでは判りにくい、思索の綾が縦横に張り巡らされているのである。

「プログラムは、まずイントロダ

クションとしてのフーガ(フーガの技法)から『コントラプク투스』で始まり、同『3度の対位における10度のカノン』とカーター作品で各種カノンを聴いた後、メシアンの〈前奏曲〉で一段落します。この〈前奏曲〉にも、実はカノンが用いられています。」と彼は言う。

「それと同時に、メシアンの〈前奏曲〉は、後半プログラムのフーガ5曲を導くための“前奏曲”という意味もあわせ持っています。ご存知のように〈フーガの技法〉には前奏曲がありませんから、“前奏曲とフーガ”の前奏曲部分をメシアンの〈前奏曲〉で代用しているわけです。」

そして最後にベートーヴェンのソナタの中のフーガで、演奏会を締めくくります。」

もう一つのプログラムの見方としては、“ポリフォニー/ポリフォニスト”がキーワード。

「プログラムの中で、バッハ〈フーガの技法〉は“時間の連続体”として横たわり、ポリフォニーのいく

つかの側面がそれ自身に組み込まれています。

100歳を迎えるJ. E. カーターは、私にとって現存する最も素晴らしいポリフォニスト(多声音楽作曲家)です。バッハが音楽史上のポリフォニストの代表だとすると、カーターは現代ポリフォニストの代表というわけです。



カーターの2作品は4分くらいの短い曲ですが、アイデアがとても新鮮です。2声でカノンのように書かれていて、バッハと同じくそれぞれが強い意志によって作曲されています。

メシアン作品においては、ポリフォニーは技術として偶発的に扱われています。オルガニストが弾いているのが見えるような曲もあり、ときにカノンも出てきます。ベートーヴェン作品においては、ポリフォニーが引用され(ソナタ形式に、異なる様式であるフーガが移植されている。このように4人の作曲家が、違うやり方でそれぞれポリフォニーを見事に具現しているのです。)



「後半に演奏する〈フーガの技法〉からの5つのフーガは、3つのドラマティックな二重フーガの間に、シンプルな2つのフーガを配しました。後者とベートーヴェンにもさらに関係性が隠されています。

シンプルなフーガの二つめの『コントラプク투스XII.2』は、〈鏡像のフーガ〉(同XII.1の上下が逆に進行)ですが、それはベートーヴェンのソナタの後半のフーガ、同じく〈鏡



像のフーガ)を予告しているのです。

また、“悲嘆”もキーワードで、〈フーガの技法〉の『反進行における拡大カノン』の悲哀に満ちた表情豊かなカノンと、母を亡くした直後のメシアンの作品〈前奏曲〉、そしてベートーヴェンのソナタの“悲しみのアリオード”を結びつけています。」

「このプログラムにはたくさんの曲が並んでいますが、それらが有機的でとても組織的であることを聴き終わったら感じていただきたいと思います。何しろ、今回の東京のリサイタルだけに私自身が考えたプログラムですから! プログラムを聴き終ったら感じていただければ、大きなよろこびです。聴衆に敬意を表し、いかに知的好奇心に訴えて興味を持ってもらうか、またアプローチの方法やプログラムの意図の伝達に心を砕きます。

演奏会でバッハを弾くのは今シーズンが初めてです。弾いてみようと思いましたが、『いや、まだ早い。バッハを弾くのは音楽家として豊かになった頃、50歳になってからにしよう』と考えていて、

ようやく機が熟したのです。バッハの中でまず〈フーガの技法〉を選んだのは、あまり鍵盤楽器では弾くことの少ない曲集で、演奏法にも音楽学的にも探求するべきことがたくさんあるからです。」

7月の来日までの2ヶ月間の演奏会の予定を尋ねると、P. エトヴェシュ作曲の「2台のピアノのための協奏曲」世界初演、ブーレーズ指揮ロンドン交響楽団との録音、ミネソタのセント・ポール室内オーケストラの、リゲティの「13楽器のための室内協奏曲」とハイドンの交響曲「時計」の指揮と、ベートーヴェンの「三重協奏曲」の弾き振りはじめ、枚挙に暇がないほどの驚異的なハードスケジュール。

世界を股にかけて行なう演奏、指揮、音楽祭の芸術監督という様々な大役を心から楽しんでいるエマールは、文字通り“現代の巨匠”である。このインタビューで、改めてその感を強くした。

彼のすばらしい日本再上陸を聴きのがす手はない。

ピエール=ローラン・エマール (ピアノ)

1957年リヨン生まれ。パリ音楽院でイヴォンヌ・ロリオとマリア・クルチオに師事。1973年メシアン国際コンクールに優勝し、19歳でピエール=ブーレーズからアンサンブル・アンテルコンタンポランのソロ・ピアニストに指名され、1980年代半ばからジェルジ・リゲティの全作品の録音に加わるとともに練習曲数曲を献呈された。

現在もっとも実力の高いピアニストの1人であり、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、ニューヨーク・フィルなど超一流のオーケストラやジョン・ティモンズ、ラトル、ナガノ、サロネンなど時代をリードする指揮者と共演し、リサイタルも世界の主要都市で開いている。

現在アルテ・テレビに「20世紀の偉大な作曲家シリーズ」を収録中で、第1回のブーレーズ編が絶賛を得た。CDの最新盤はテルデックからの「ベートーヴェン:ピアノ協奏曲全集」(アーノンクール指揮ヨーロッパ室内管)など。

6/6(金) 22:00~
NHK教育テレビ

「芸術劇場」
J.S.バッハ:
フーガの技法 BWV1080
2/17
ロンドンのウィグモアホールでの演奏

音楽の過去、現在、未来すべてに光を当てる、現代最高のピアニストの1人。

WORLD
PIANISTS SERIES
2008-2009

ピエール=ローラン・エマール ピアノ・リサイタル

PIERRE-LAURENT AIMARD

7/15(火) 19:00 東京オペラシティ

J. S. バッハ: フーガの技法 BWV1080より カーター: 2つのダイヴァージョン
メシアン: 「8つの前奏曲」より ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 op. 110

¥7,000 ¥5,000 ¥4,000 プラチナ ¥12,000

1973年メシアン国際コンクールに優勝、「現在並ぶものがない」と評される完璧なテクニックに支えられ、現代音楽における色彩感とリリスムに満ちあふれた演奏はブーレーズ、リゲティら大作曲家からの信頼も厚く、またモーツァルト、ベートーヴェン、シューマンなどでも、深い精神性を湛えた演奏で高く評価されています。とりわけアーノンクール指揮ヨーロッパ室内管と録音したベートーヴェンのピアノ協奏曲全集は絶賛を集めました。バッハからメシアンまで幅広いレパートリーをどのようにプログラミングし、どのように斬新な演奏を披露してくれるか、大きな期待がかかります。



NHKホール楽屋にて、インタビュー、野平多美と